

【要 旨】

わが国では、経済連携協定（以下、EPAとする）の推進によって、インドネシアおよびフィリピンより看護師、介護福祉士候補生を受け入れている。これらの候補生は、使用言語を初め、宗教、価値観や信念、規範、生活様式など、自分たちとは異なる文化を有している日本人へケアを提供することとなる。

文化の異なる対象者へケアを提供する際に問題となるのは、ケア提供者の異文化間能力（Cultural Competence）である。これは、対象者の文化を尊重し、それを考慮したケアを提供する能力のことであり、文化を超えた看護（Transcultural Nursing）の概念を提唱したLeiningerが主張している。

EPAにより来日している外国人看護師候補生が日本人対象者へケアを提供する際、この異文化間能力について考えなければならない。しかし、外国人

看護師候補生がどのように異文化間能力を獲得し、向上させているのかは明らかにされていない。彼らが日本の文化をどう捉え、対象者をどう認識しているのか、また、日本の文化をどのように考慮して対象者にケアを提供しているのかを明らかにする必要がある。そこで本研究では、外国人看護師候補生の来日後の看護実践体験を明らかにし、その内容を分析することによって、外国人看護師候補生の異文化間能力獲得および向上のための教育的課題を見出すことを目的とした。

調査は、2010年7月～10月に中国・九州地方の3県に所在する4つの医療機関に勤務しているEPAにより来日しているインドネシア人およびフィリピン人看護師候補生9名を対象に半構成的面接を実施した。得られたデータは逐語化し、スーパービジョンを受けながら質的帰納的分析を行った。